

仲間とともに学び合う学習室への試み

子どもたちと子どもたち、子どもたちと教師とのコミュニケーションの場を求めて

寺 本 学

1. はじめに

個別化・個性重視がさげばれ、求められている。しかし、一方では、ますます学級が崩壊し、学校は魅力をなくしているといわれている。

毎日、目の前の子どもたちからは、「なぜ学校へ来なければならないのか。」「入試・テストで点数さえ取ればいいじゃないか。」「義務教育への疑問を感じる。」「だれにも迷惑をかけてないじゃないか。」「やりたくもないのに大人にやらされていることばかりだ。」こんな疑問が投げかけられてくる。

『クラスはよみがえる』の中で、筆者（野田俊作氏・萩昌子氏）は現代の子どもたちの姿を次のようにとらえている。

「競争原理で生きる人にとって、他者は敵です。（中略）現在の育児と教育のシステムは、ひどい競争原理の上に組み立てられています。そのため、たいいていの子どもたちは、小学校に入学してくるときにはすでに、協力原理よりも競争原理のほうをしつかりと身につけてしまっています。（中略）今の子どもたちの関心の的はひたすら自分自身にだけあります。（中略）自分自身が安全でいられることだけが関心事なのです。これはとほうもなく悲劇的なできごとです。」

こういう時代の中で生まれ、育てられ、成長していかなければならない子どもたち。そして、子どもたちとの間に上下関係を作ることで安心し、また、教師（大人）の力で子どもたちを従えようとしてきた自分自身が、今、そこにいる。

いったい、今の私に何ができるのか。日々疑問と無力感を感じるころである。今のままで子どもたちに近づこうとすればするほど、子どもたちは遠ざかっていくように感じるからである。

96年度文部省学校基本調査によると年間30日以上学校を休んだ「不登校」の小中学生が5年連続で増え、約9万4千人と発表され、中でも、中学生は前年度より約1万人近く増え60.6人に1人となり、この5年間で「3クラスに1人」から「2クラスに1人」に増えたことになる。子どもの数が年々減る中で、不登校は逆に増加の一途をたどっている。

そして、30日以上の不登校の中で、学校における友人関係や教師との関係、学業不振など「学校生活での影響」が引き金となった者は、中学生では41.40%にもなるという。

また、神戸市の中学3年生による小学生連続殺人事件によって「透明な存在」として生活しなければならない子どもたちの姿が、浮かび上がってきた。「人との関係が作れずストレスをため、自分を抑圧する中で、突然、自分中心の権利を主張する子がいる。」など、現在の学校においては、教師と生徒、生徒と生徒の間で、コミュニケーションが崩壊の危機に瀕しているという指摘もある。

そして、「今の子どもたちはみんな自分は駄目だと思っている。社会的には点数という1本の物差しで評価されるのでできない子は自信の持ちようがない。できる子もまた、成績がいいということだけでは自身を肯定できない。自己肯定感、人間関係の中で、他人にも受け入れられ、居場所を見つけることによって初めて生まれるものですから。」と自分自身を喪失した子どもたちの姿をとらえている人もいる。

子どもたちにとって、居場所でなくなってしまった学校がここにある。

このような状況であるからこそ、1人ひとりの子どもたちの多様なあり方をよく見つめ、積極的に受けとめ、その差異を学びの原動力とする学習室の創造に努めなければならないと思われる。

私は、まず、子どもたちと子どもたち、子どもたちと教師の関係づくり（かかわり）から変えていかなければならないのではないかと考えている。

1人ではなく、仲間（教師もその1人として）とともに学んでいることを実感し、それぞれの違いに気づき、考えを重ねたり比べたりしながら出し合っていくことに価値を見だし、お互いを認め合って生きていけること。そこに、「生きる力」も育ってくるのではないかと思う。

私が求めようとしたものは、1人ではできない、学校・学年・学級という社会の中で育まれる学習である。

教室は教師の一方的な知識注入の場ではなく、子

どもたちが相互に認め合える関係を持つ場所であり、教師と子どもたちとの信頼・協力関係によって成立する場所ではなければならない。

では、日々の実践の中でどのような国語学習を展開していくことが可能なのであろうか。

2. 研究のねらい

この研究は、日々の学習記録（主としてルーブリックによる記録）を活用した音声言語による学習指導を通して、学習者が対象や他者、自己ととかわかり、それが、国語学習室の基盤を作り、お互いのコミュニケーション（通じ合い）を生みだしていくのに効果的であるのかどうかを、3年間の継続実践を通して考察してみようとしたものである。

3. 研究の基盤

(1) 「生きる力」とコミュニケーション能力

第15期中教審第1次答申で「生きる力」の育成が提唱された。その「生きる力」は文部省の英訳によると（Zest for living）とされ、「生きることへの熱意、生活への興味・関心」とでもいえそうである。

では、「生きること」とは何であろうか。神谷美恵子氏は「人が育つということ、生きるということは、周囲から切りはなして考えることはできない。とりわけ育つということは育てるものあり方と密接に関係している。」と、人間はさまざまな人・こと・ものとかかわりながら成長し生きていくものであることを示している。

人は1人では生きていけないし、社会を作っていくこともできない。他者を拒否し、役割を放棄し、関係を断絶することで居場所をなくしてしまっていた子どもたちに、他者とかかわりの中で自己を見つけた（自分探し）、育てたり（自分づくり）していくことができる力を育てていくことが、今、最大の課題として提示されているとも言えそうである。

ここでは、そのような「相手とかかわりあい、通じあう力」をコミュニケーション能力としてとらえ、考えていくことにする。

(2) コミュニケーションの場

まだまだ、教室ではいきいきとしたコミュニケーション活動が行われているとは言い難いし、コミュニケーションの場として解放されてもいない。

生徒たちは学習の中でも義務感で話し、聞いているようにも思える。今、自分はどのような場で、何の

ために、誰に向かって話をしようとしているのかが見えていないし、意識もしていない現状がある。

安居総子氏は、「コミュニケーション力をつけるには、仲間と学びあう「場」が設定されていなければならない。「学び合いの場」とは、（その前に自ら学ぶことが習慣化されていなければならないが）仲間とともにいることで、他との違いに気づき、比べ、話し合いで考えを出し合って新しい視点や考えを発見でき、それらを整理して自分なりの結論（思想や心情）を出せる場である。」と述べ、「そのために、どのような学習の枠組みにするかを考えるのである。」と、指導者の学習づくりへの意欲と努力を喚起している。

教室がコミュニケーションの場として機能するためには、「学習者がお互いを認め合える、心の開かれた学習室」であるという基盤をもたなければならない。

目の前にいる子どもたちで考えれば、「人の考えを正しく相手に伝えることができる」「人の考えを聞いて、さまざまな視点や感じ方を発見することができる」「人の考えを聞いて、自分の考えとの共通点や相違点を考えることができる。」このような力を育てることのできる学習の場を作っていくことであると考えられる。

そして、同時に「人の考えを聞いて自分の考えの変化やふくらみを表現することのできる」力を育てる学習の場を作っていくことでもある。

(3) コミュニケーションの場づくり

次にあげる倉澤栄吉氏の主張にも促され、私は音読を有効に使うことで子どもたちと子どもたち、子どもたちと教師とのコミュニケーションの場を創造しようと考えた。

倉澤氏は「教室での音読は何かといえば、本質的には、発表行動である。だから読の字に捉われずに、これをはなすこときくことの中へ含めるべきである。教室音読とは「文字記号を手がかりとして音声化し、それを級友に伝える」のである。（中略）音読を、このように表現活動として考えていくことは、読み手に対して、「だれかに、よんできかせる」というコミュニケーションの場に立たせることである。」と述べ、「今後研究すべき課題として、教師は○だれによませるか○音読する材料は何であるか○きき手はそれを欲しているか、楽しむか○音読によってすべての（特定の）児童がどのような効果が得られるかなどを良く反省しておく必要がある。」と課題も提示している。

従来、音読・朗読では、理解度や技術・テクニッ

クを評価しがちであったように思う。いかに、うまく読むか、つまり、NHK放送コンクールの評価項目にあるような・内容の把握・表現の仕方・テンポ・ポーズ・発音・発声・アクセント・イントネーションなどに指導者はあまりにも縛られすぎではなかっただろうか。

音読指導は理解力・鑑賞力・表現力を養う上に大きな意味を持つと考えられる。しかし、それが、生徒自身の必要感や興味・関心に支えられていない音読指導であっては、どうあがいても教師の自己満足でしかなく、生徒自身には学習価値を感じさせることはできなかった。

今まで、音読指導に使われる教材を、教科書に載ったもの、大人の立場で書かれたもの、そして、みんなが同じ材料として持っているものに限定しすぎたのではないか。

「みんなが知らない発見のある情報を、今私が私の声によってみんなに伝えている」という新鮮な音読の価値や実感を持たせるような、新たな学習の場を作っていかなければならないと考えた。

そのような力を育てることが可能であろう学習の単元として、音読による感想・意見の紹介を中心とした帯単元を構成してみようと考えたのである。

4. 「授業びらき」

(学習訓練と帯単元「みんなの声」1995、第1学年、4月の実践より)

(1) はじめに

本校は、本年度165名の新生を迎えた。それぞれ31の小学校から集まった新たな集団である。入学に際して書いた文章(入学の決意)を見ると、1人ひとりの生徒が心を新たに、これから始まっていく中学生活に夢や希望を持ちチャレンジしていくぞという思いを抱いている。

このような新鮮な気持ちを抱いて入学してきた生徒たちとどう出会うかは、これからの3年間の中学校での国語学習の方向を決定する大きな出会いとなることは間違いのないところである。

では、この生徒たちとの出会いをどう工夫していったら良いのだろうか。今、目の前にいる生徒をどうつかみ、どのように方向づけていけばよいのか。日常の学習における指導の中でどのようにして生徒を評価していけばよいのか。最も基本的な評価活動である教師の肉眼による観察、評価眼をみがくにはど

うしていけばよいのか。

それらを考えながら実践していくことは、すなわち、新しい学力観に立ち、1人ひとりの生徒を生かすことにつながってくるはずである。

指導要領総則にも「学校の教育活動を進めるに当たっては、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」とされ、日々の学習の中で可能な限り生徒のもっている力の細かな点をチェックし、1人ひとりの個性を知り、今後の中学校での国語学習にかかわる力を身につけさせていくことが、これから1人ひとりの個性を生かすことにつながっていくと考えている。(本来小学校において身につけているはずの学ぶ力がかなりの部分を占めることになるが、それは、今の生徒の実態を確かめるのに大変有効な確認ポイントとなると考えるからである。)

(2) 1学期の実践の柱(目標)

- ① 学習記録の充実(生徒の学習実感・実態をつかむために)
 - ・160の生徒との対話(ルーズリーフによる)
 - ・授業リフレクション^(注1)と次の学習へのつながり
- ② 帯単元「みんなの声」による学び(生徒の声で始まり、生徒の声で終わる学習室づくり)
 - ・お互いを知り、認め合い、刺激し合う。(存在感のある学習室づくり)
 - ・人の感想をその人に代わって紹介する。(個性の尊重)
- ③ 目の前の生徒からの出発(学習者研究、学習材研究)
 - ・学力と学習材料
 - ・学習の時期(特に4月5月に留意すべきこと)
- ④ 国語教室通信による国語情報の提供(資料①、⑧、⑨、⑬)
- ⑤ 国語学習の基盤作り

(3) 学習訓練の実際

(第1学年初めの学習訓練による学習の流れとねらい)

- ① 単元「国語学習の初めに」(4・5月…16時間)
- ② 基盤
 - ア この単元は、国語をともに学習していくということはどういうことなのかを、実際の学習の中で体験しながら、ともに考えようと試みた学習である。知識偏重の教育、目に見える学力としてペーパーテストが重視され、卒業していった生徒の中には、「書く」という行為に何の価値も見いだせず、人の意見・感想・考えを「聞く」ことにも価値を感

④ 学習材料

- 教科書（教育出版「国語1」）「朝のリレー」
- 国語教室通信1号、2号、3号、4号、5号
- 教師のスピーチ1、2
- プリント「早口言葉」「あいうえお」まどみちお
- ファイル
- ルーズリーフ

（「学」のつく熟語、言葉と豊かさ）

要点をとらえながら聞く（3時）

ケ 国語辞典の利用

辞書利用の習慣化（毎時）

コ 「みんなの声」準備

感想の紹介とそのポイント

学習室づくりへの第1歩（3時～）

（上の○印は忘れ物や準備のチェックである。）

⑤ 指導計画（全16時間）

○第1次（1時間目～4時間目）

ア 国語教室通信1号…事前に配布（資料①）

学習情報の提供と自主学習へのいざない

イ ファイル、便覧、学習記録チェックの配布

正しい応答（1時）

ウ ルーズリーフの使い方、感想の書き方、（資料②）

学習記録を継続的に書く意欲と力（1時）

ルーズリーフ 1年2時間目（資料③）

4/4 (2)

| 1年4組 31番 氏名 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
|-------------|---------------|----|---|---|---|
| 1 | 提出すべき時に提出したか | AA | B | C | |
| 2 | 丁寧に文字がかけたか | AA | B | C | |
| 3 | まとまった意見や感想がかけ | AA | B | C | |
| 4 | 国語学習への努力や工夫 | AA | A | B | C |

検
95.4.11
寺本 季

1) 国語学習のスタート
リフィルの使い方

2) 国語学習の始まるまでに準備
準備物を机の上に出しておく
。ルーズリーフの右上に日付と授業番号を記入
。ルーズリーフに線を引く
。黒板を消しておく
。辞典、教科書、メモ用紙を切るはる
ルーズリーフ
氏名を書く、鉛筆、静かに着座係、感想をメモ
整理、おみ復習、日ごとの見落としチェック、自習
先生の机、フーナー

3) 先生のスピーチ(1)

名前には五十何通りある
生きていく人にも名前が一人ある
生きていく人にも名前が一人ある
名前は人が変わることはないが、名前が変わることはない
名字でクラスを区別するのと、名前が近い人になるようになる
世の中には名前が同じな人もたくさんいる

親はどういう願いで名前を付けたらいいか

メモ、感想
「メモ、感想」で書いて欲
くなくとも、楽しかった
おもいも、よかったな
書く量は半分くらい
国語学習の始まるまで
に準備はいいと出ました
みんなの意見を出し合
いがあると色んな意見が
出るんだと気づきました
「名前」では、私は親の
願っているように自
らに決めようと思いました
名前を知っても、由来と
はわからないかある
かわからないかと思
いました。

ルーズリーフ 1年1時間目（資料②）

4/3 (1)

| 1年4組 31番 氏名 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
|-------------|---------------|----|---|---|---|
| 1 | 提出すべき時に提出したか | AA | B | C | |
| 2 | 丁寧に文字がかけたか | AA | B | C | |
| 3 | まとまった意見や感想がかけ | AA | B | C | |
| 4 | 国語学習への努力や工夫 | AA | A | B | C |

検
95.4.11
寺本 季

国語学習のスタート
ルーズリーフの書き方(1)

1) 日付、授業番号
「初め、始め」か？
2) ここの学習
一回、正しく聞き取る
。正しい応答の学習
③ あなたの列は何人ですか？
五人です
④ あなたの列には何人いますか？
五人います
⑤ あなたの列の人数はだんてか五人ですか？
五人です
⑥ あなたの列は五人いますか？
五人います
⑦ あなたの列は七人いますか？
五人います
いえ、五人います

感想
国語教室通信1号
読んで、言葉に感
ずる知識や、豊かに
なると思いました。
今日は今日の授業下
ごとの学習をしたと
色んな受け答えがあ
り、なると思いまし
今日はいくつか
準備物を忘れてしま
った、私は忘れてしま
ったか、今度忘れれ
ないようか、おま
り、あたりまえのこと
人になりたてです。
これから年間忘れ物
を七つ、授業に早く
参加していきたいです。

エ 準備物チェック

学習へ向かう態度の習慣化（2時～）

オ ルーズリーフのチェック

学習へ向かう態度の習慣化（2時～）

カ 教師のスピーチ1（資料③）（名前と国語学習）

要点をとらえながら聞く（2時）

キ 忘れ物のルールと表現

声、身体、文字による表情と表現（3時）

ク 教師のスピーチ2

サ 教師の教室での場所

話す相手と声の大きさ（毎時）

シ 学習準備チェック

学習へ向かう態度の習慣化（4時～）

ス 学習の係（板書係と時間係から）

学習室づくりへの準備（4時～）

○第2次…学習室づくりに向けて（4時間～）

ア 帯单元「みんなの声」の進め方（資料④）

（感想の紹介、要約の見本と語彙指導、メモの力、言葉の補助など）

イ 帯单元「みんなの声」でつけた8つの力（資料⑤）（意見発表、メモの力）

ウ ファイルの完成…漢数字、算用数字、本の名称（表紙、背表紙、裏表紙）（5時）

文字の書き方と適切な大きさ、記名についてのスピーチ

帯单元「みんなの声」学習計画（案）

（資料④）

| 時間 | 生徒の学習内容 | 学習でつきたい力 | 留意、指導事項 |
|----------------|---|--|--|
| 5 学習の 初め | <ul style="list-style-type: none"> ・板書系の活動 ・帯单元「みんなの声」(読む) 2名が前に出て、前時の感想を紹介する。 授業の終わりに感想を話す人を確認する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・感想の要点をとらえながら聞くことができる。 ・メモをとりながら聞くことができる。 ・内容が良くわかるように、適切な声の大きさと読み、話すことができる。 ・短い文章で自分の感想を紹介できる。 ・友達の感想を聞き、自分の見方や考え方を広げることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・事前に2名を呼び、読みの確認しておく ・後ろに立ち、教室での声の大きさを確認する ・授業の終わりに二人に今日の話の内容を確認する。 |
| 5 学習の 終わ | <ul style="list-style-type: none"> ・時間係 ・学習のまとめをする。 学習記録の充実 ・帯单元「みんなの声」(話す) 授業の終わりに感想を話す人を確認する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・学習記録を充実させ、工夫しようとする態度を育てる。 ・自分の感想とかかわらせながら人の意見や感想を素直に聞いたり、書いたりすることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 5分前を全員に告げ、学習記録に取り組むための係。 ・授業の終わりに二人に今日の話の内容を確認する。 |

感想を紹介する学習のために

（資料⑤）

平成7年4月18日

| | |
|--|---|
| <p>学習のための準備</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、必ずその日の授業の終わりに国語係にルーズリーフを提出する。 2、ルーズリーフの学習記録チェックは自分でもつけて提出すること。（ただし、鉛筆書きのこと） <p>授業の初めに</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、出席順（男子1名・女子1名の順）に前に出て、（その日の授業前に先生のところまで来ること） 2、2～3名ずつの感想を紹介する。 3、紹介の仕方 <ol style="list-style-type: none"> 1) 僕は、（私は）今日は人の感想を紹介します。（線が引いてあるところをさっと読む） 2) メモの欄を利用して、先生がどうしてこの人を紹介したかったか考えてみましょう。 3) 一人目を紹介します。次は、… まずこの人の感想です。 次の感想は… この人の感想から聞いてください。 二人目は、… 最初はこの人の感想です。 二人目の感想は、… 初めは〇〇さんの感想です。今度は、… 誰の感想だと思いますか。 大変長い感想ですから、聞きもらしのないように | <p>僕も同じことを感じました。 授業からこんな感想が出るなんて、… 生活の中の、…こんな場面を思い浮かべました。 敬語をうまく使ってあるのに驚きました。 見えないでしょうが、とてもいいいな字で書かれています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 4) これで授業の感想紹介を終わります。 5) 今日の事業の終わりには〇〇くんと〇〇さんが感想を紹介することになります。 <p>帯 単 元 （この学習でつくれる力）</p> <ol style="list-style-type: none"> ①、友達の感想を聞き、話しことばと書き言葉の違いに目を向けることができる。 ②、感想の要点をとらえながら聞くことができる。 ③、メモをとりながら聞くことができる。 ④、内容が良くわかるように、適切な声の大きさと読み、話すことができる。 ⑤、言葉づかいに注意して話すことができる。 ⑥、自分の考えをつけ加えることができる。 ⑦、短い文章で、自分の感想を紹介できる。 ⑧、友達の感想を聞き、自分の見方や考え方を広げることができる。 |
|--|---|

- オ 国語教室通信1号・2号を使って
説明と辞書の紹介と利用、暗唱(8時)
- カ 国語辞典クイズ(7時)
- キ 座席評価表を利用した指導と評価(毎時)
- ク ルーズリーフによる学習記録チェックと学習記録による対話、実態把握(7時)
- ケ 小学校学習漢字の確認1
・通信の利用、教科書の利用
・身についた漢字の確認(7時)(9時)
- コ 本の名称(見返し、とびら、奥付)
・学習記録を仕上げる準備(6時)
・まえがき・凡例、書名・編者・出版社、表紙絵
- サ 8回の学習を振り返って(資料⑥⑦)
・今までの学習を振り返る
・新しいチェック表の意味を考える。(9時)
- 第三次…音読の基礎(11・12時間目)
- ア 暗唱大会
・四人組で(プロンプター・司会)
・話し聞く力の基礎1(声の大きさ、発音、リズムに留意させての実践)
・声を出す楽しさ、一人でできないことを体感する
- イ 範読、聞く、音読、斉読、
・音読の楽しさ、みんなで読む(13・14時間目)
・「早口言葉」、通信4号・「あいうえお」
●正しい発音・発声をする
●適切な大きさの声を出す
●リズムにあわせながら音読する
●楽しく声を出す雰囲気をつくる
●協力してひとつのものに向かって学習する。
- ウ 発展学習「朝のリレー」(15・16時間目)
●みんなで作る「朝のリレー」

- ・教師の群読案をめぐって考える。
- 教室全部を使って「朝のリレー」をしよう。今後補足したい基本的な力にかかわる学習メモ
- 1) 小学校学習漢字の研究1
・同訓異字(通信の利用)
・教科書の利用・漢和辞典の利用
・学習漢字一覧表(記録、記憶、応用)
・同音異義語・同訓異字の学習
・常用漢字の学習(序)
・教科書と共に、漢字の広場1(画数と活字の字体)
付録3 小学校配当漢字音訓一覧
漢字の広場2(漢字の筆順)
付録4 一年の新出漢字と用例一覧
漢字の広場3(漢字の部首)
付録5 中学校で学習する小学校配当漢字音訓一覧
漢字の広場4(漢字の音と訓)
付録6 常用漢字音訓一覧(小学校配当漢字を除く)
言葉の研究室1(言葉の音と意味)
付録7 常用漢字表の付表
同音語・類義語・多義語
言葉の研究室2(話し言葉と書き言葉)
言葉の研究室3(日本語の音声)
- 2) 教科書の研究1(教科書の意味、教材が先にあるのではないという発想から)
・ほかの教科書との違い(内容を伝えるものではなく言語活動を展開する中で言葉の力がつくもの、一冊の本として、未来を志向して学力を練る材料)
・活字、挿絵、映像、文字、語句、読み比べ、調べようとして何度も読む、語彙学習の欠落
・漢語、和語、外来語、語感、比喩、複合語、センテンス文頭文末、文章論、題の研究

これは中学生になってからの「8回のルーズリーフを振り返る」という学習です。

| 1年4組4番 氏名 | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
|--|-------------------|--|--------|------|---|---|---|---|
| 学習自己記録チェックの第一回目自己評価 | 1 提出すべき時に提出したか | ※ | ※ | A | ※ | B | ※ | C |
| | 部評価 / B | | | | | | | |
| | 2 丁寧に文字が書けたか | AA | | A | | B | | C |
| | 部評価 / B | 6 | | 2 | | | | |
| 4月その他 | 3 まとまった意見や感想が書けたか | AA | | A | | B | | C |
| | 部評価 / B | 8 | | | | | | |
| | 4 国語学習への努力や工夫 | 努力した 小学生の時より していない | | | | | | |
| | 自己部評価 文章で | 練習を繰り返すだけでなく自分の感想も付け加えた。感想も自分の文章で書けた。 | | | | | | |
| 総合感想 | 文字の書き | 異をつけた | 1度チェック | 2度以上 | | | | |
| | 自己部評価 文章で | 自分の感想も付け加えた。自分の文章で書けた。 | | | | | | |
| | 忘れ物 | 1度もない | 1・2回 | 3回以上 | | | | |
| | 自己部評価 文章で | 忘れ物がないのを付けていたのに、忘れ物があった。反省して、忘れ物を減らした。 | | | | | | |
| 国語の授業では、自分の教科書も工夫している と、思っている。教科書の読みかた、感想の工夫、自分の感想、 いま、自分の教科書に、自分の工夫を付けていきたいです。 (教科書活用) | | | | | | | | |

資料⑥
○についてはこの8月、自分で努力したことを振り返って書きましよう

| 1年4組4番 氏名 | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
|--|-------------------|--|--------|------|---|---|---|---|
| 学習自己記録チェックの第一回目自己評価 | 1 提出すべき時に提出したか | ※ | ※ | A | ※ | B | ※ | C |
| | 部評価 / B | | | | | | | |
| | 2 丁寧に文字が書けたか | AA | | A | | B | | C |
| | 部評価 / B | 6 | | 2 | | | | |
| 4月その他 | 3 まとまった意見や感想が書けたか | AA | | A | | B | | C |
| | 部評価 / B | 8 | | | | | | |
| | 4 国語学習への努力や工夫 | 努力した 小学生の時より していない | | | | | | |
| | 自己部評価 文章で | 練習を繰り返すだけでなく自分の感想も付け加えた。感想も自分の文章で書けた。 | | | | | | |
| 総合感想 | 文字の書き | 異をつけた | 1度チェック | 2度以上 | | | | |
| | 自己部評価 文章で | 自分の感想も付け加えた。自分の文章で書けた。 | | | | | | |
| | 忘れ物 | 1度もない | 1・2回 | 3回以上 | | | | |
| | 自己部評価 文章で | 忘れ物がないのを付けていたのに、忘れ物があった。反省して、忘れ物を減らした。 | | | | | | |
| 国語の授業では、自分の教科書も工夫している と、思っている。教科書の読みかた、感想の工夫、自分の感想、 いま、自分の教科書に、自分の工夫を付けていきたいです。 (教科書活用) | | | | | | | | |

資料⑦

みんなの意見
 1. 自分たち
 2. 自分たち
 3. 自分たち
 4. 自分たち
 5. 自分たち
 6. 自分たち
 7. 自分たち
 8. 自分たち
 9. 自分たち
 10. 自分たち
 11. 自分たち
 12. 自分たち
 13. 自分たち
 14. 自分たち
 15. 自分たち
 16. 自分たち
 17. 自分たち
 18. 自分たち
 19. 自分たち
 20. 自分たち
 21. 自分たち
 22. 自分たち
 23. 自分たち
 24. 自分たち
 25. 自分たち
 26. 自分たち
 27. 自分たち
 28. 自分たち
 29. 自分たち
 30. 自分たち
 31. 自分たち
 32. 自分たち
 33. 自分たち
 34. 自分たち
 35. 自分たち
 36. 自分たち
 37. 自分たち
 38. 自分たち
 39. 自分たち
 40. 自分たち
 41. 自分たち
 42. 自分たち
 43. 自分たち
 44. 自分たち
 45. 自分たち
 46. 自分たち
 47. 自分たち
 48. 自分たち
 49. 自分たち
 50. 自分たち
 51. 自分たち
 52. 自分たち
 53. 自分たち
 54. 自分たち
 55. 自分たち
 56. 自分たち
 57. 自分たち
 58. 自分たち
 59. 自分たち
 60. 自分たち
 61. 自分たち
 62. 自分たち
 63. 自分たち
 64. 自分たち
 65. 自分たち
 66. 自分たち
 67. 自分たち
 68. 自分たち
 69. 自分たち
 70. 自分たち
 71. 自分たち
 72. 自分たち
 73. 自分たち
 74. 自分たち
 75. 自分たち
 76. 自分たち
 77. 自分たち
 78. 自分たち
 79. 自分たち
 80. 自分たち
 81. 自分たち
 82. 自分たち
 83. 自分たち
 84. 自分たち
 85. 自分たち
 86. 自分たち
 87. 自分たち
 88. 自分たち
 89. 自分たち
 90. 自分たち
 91. 自分たち
 92. 自分たち
 93. 自分たち
 94. 自分たち
 95. 自分たち
 96. 自分たち
 97. 自分たち
 98. 自分たち
 99. 自分たち
 100. 自分たち

5. 帯单元「みんなの声」の準備と出発

(中学1年生、4月～現在)

(1) 目標

- ① 生徒たちを常に「話し・聞く」場に立たせ、紹介したり、コメントをしたり、題をつけるという活動を習慣づけ、コミュニケーションの場をつくることができる。
- ② 自分が発言することや感想を素直に真剣に書くことがみんなに役立っていくという社会性を持たせることができる。
- ③ お互いが心を通わせ合い、他者の視点の違いや、感じ方、書き方の違いなどを発見することができる。
- ④ 教室の中で心を解放させていくことができる。

(2) 学習材 (ルーズリーフと紹介係のコメント)

毎時間の終わり5分間を使って、生徒たちは学習記録を書いている。ルーズリーフの感想・メモ欄には、発見や気づいたこと、疑問や提案を素直に書くように指導してきた。そして、この学習記録を毎時間後提出させ、目を通し、チェックする。(教師から一言書き添えることもある。)

その時に、10名程度の視点や感じ方、表現の違いを指導者が見つけ出しておき、次時の初めに紹介用の感想として扱うのである。



写真(事前に板書係の仕事をしているところ)(資料⑩)

毎時間のこの活動によって教師も生徒と学習記録紙上で対話していく。実際に1人ひとりの生徒と言葉を交わすことは不可能である。限られた時間の中で生徒を理解し、尊重していく大切な場の1つであり、学習材作りであるといえる。

毎回の学習を教師とともに作っていく紹介係について、次のように生徒は書いている。

「みんなの声」で変化したこと。それはコメントです。感想を紹介する人は、その感想から学んだり、同意する部分を僕たちに教えてくれるようになったのです。これからも自分の意見を自分なりに表現していけるようなコメントを目指したいです。(3年T男)

(注)(1年生の途中から、コメントと題をつけるという学習をつけ加え、感想紹介者が自分の言葉で紹介した感想にコメントをつけ始めている。)

「みんなの声」の紹介の時に複数の感想の中から自分で好きなものを選べるようになった、自分にあった感想を選べるのが嬉しい。感想のコメントで、言うことがなかったり相手の意見に否定的だったりする時は何を言うか困った。今なら相手の意見を認めてから自分の意見を言うことができるが、1年生の時などとても苦労した。また、多くの意見を聞いて(読んで)からコメントを言えるというところも私にとっては有り難い。

感想紹介は以前より少なくとも私にとっては良いものになっている。(3年K子)

(注)(紹介用感想の選択性を取り入れたのは3年生になってからである。)

(3) 係活動と学習の流れ

授業では、初めの5分がみんなの声の紹介、終わりの5分が次回の「みんなの声」に向かった記録の時間である。

今現在、次のような学習係が活動している。

- ・国語係(2～3名)
学習前、学習後を中心に活動する。ルーズリーフの返却と回収、連絡を担当する。
- ・板書係(1名)
学習準備として授業開始までに、月日・通算時間・学習内容(みんなの声の紹介者など)を板書する。
- ・紹介係(2名)
事前…今日音読紹介をする人のルーズリーフを選び、一度、黙読か音読をする。
その感想へつける題やコメントを事前に考えておく。
学習中…2人が前で紹介し、コメントする。
- ・時間係(1名)
学習記録をまとめる時間がきたことを知ら

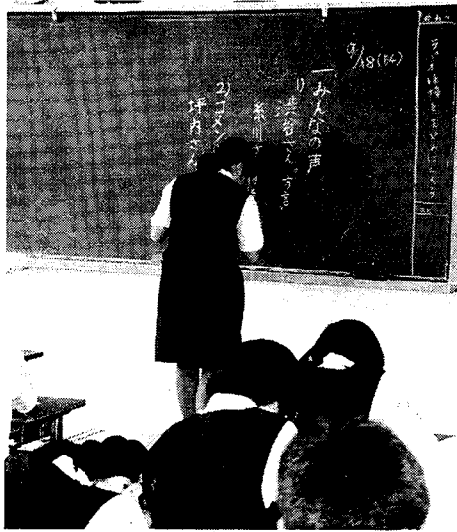
せる。(終わり5分が通例)教師も話の途中であつても終了する。

これらの係は、次のようにして毎週、「国語教室通信」(週1回発行)で事前に知らせている。

(資料⑩)

| | | | |
|------------------|-------|----|----|
| かやの外堂の命 | 武田麻子 | 1組 | 9月 |
| ふるまを歌う部屋に空を飛ぶ | 福富純子 | 2組 | 9月 |
| かうこにこぼれ落ちるなつ棠 | 坪内杏子 | 3組 | 9月 |
| おけいもまたかみづく秋のそら | 野澤隆臣 | 4組 | 9月 |
| 風もなく光か頼(夏運ぶ) | 杉本真喜子 | 5組 | 9月 |
| 夏赤し昼(暖一時) | 増田有一 | 6組 | 9月 |
| 夏の歌(つづ)増えるか(夏細工) | 吉岡香葉子 | 7組 | 9月 |
| 花婿からいつゆびみえり(大盛) | 吉谷聡子 | 8組 | 9月 |
| どおり | | | |

国語係は事前に前回のルーズリーフを返却し、学習へのいざないを手伝う。板書係は、黒板に日付け・通算時間・学習内容・紹介者を書く。



写真(事前に国語準備室で感想を選ぶ生徒)
(それぞれが5名程度の感想に目を通し、自分自身とのかかわりの中で、今日自分の紹介したい感想を選ぶ)(資料⑪)

紹介の時には指導者はその生徒の声が届く1番遠いところに移動する。身ぶりや声の大きさの適否を紹介者に知らせていく。もし、うまく伝わらなかった部分があれば教師が後のコメントで補足していく。そのために、紹介される感想は、コピーかメモにして教師はそれを持っておく必要がある。

(4) 準備

準備段階の第1は、指導者が提出された全ての生

徒の感想を読み、心に留めることから始まる。

次に本時と次時を思い描きながら感想を選び出していく。この準備をすることによって、授業前に紹介係となる生徒が紹介するルーズリーフを選びに来た時にアドバイスもできるし、1度声に出して読ますことも黙読させることもできる。(時によっては廊下を歩きながらその内容について話を続けることもある。)

また、「みんなの声」というからには、同じ生徒に限られることなく、多くの生徒がルーズリーフに感想を書き、提出することが必要となる。

紹介されることの少ない生徒、書くことが苦手な生徒には記録の時間を利用して、話をしたり視点を与えたりして心を耕し、刺激を与え、感想を書くことができやすいように支援していくことが必要となる。

(5) 帯単元「みんなの声」成立のために

(中学1年生、4月～)

帯単元「みんなの声」という学習を成立させていくために考えなければならないさまざまな課題の中で、次の2点については1年生の初めに特に留意したものである。

第1に、学習の中で子供たちが考えてみたくなる情報や考えるべき情報(学習材料)を指導者が提供できなければならないということ。

第2に、日々の感想をいかに素直に、評価にこだわらずに書かせることができるか、工夫しなければならないこと。

この2つの課題解決にむけて、学習の中でさまざまな刺激を提供しようとしてきた。

次に、1年生の初期の「みんなの声」で実際に生徒が紹介した「声」から、生徒の思考の跡をたどってみる。

ア 教師からの刺激によるもの(教師のスピーチ)

人の話を聞く時の態度・場所によっても話している側の気持ちを変えてしまうことがわかった。先生の小さなしぐさに驚きました。人の話を聴くというのはただ聞くだけではだめだなとあらためて感じた。(3時間目)

先生のポーランドでの体験のお話では、自分がしゃべれるんだなと思いました。自分でしゃべり、気持ちなどを伝える。あたり前のことだと思っていたけど、とても重要なことだと思いました。自分の意見が言えないことはさみしいと私も思いました。授業中も、自分の意見が言えないのはさみしいです。自分の意見が少しでも相手に伝わるようにしたいです。(5時間目)

ていくことも多い。それぞれの生徒は1人1人心の中で仲間の声を真剣に受け止め考えようとしているのである。それに気づかなかったのは教師だけだったかもしれない。

6. 帯单元「みんなの声」の実際

(3年1組97年12月)

『おくのほそ道』の学習でNHK「ETV特集」(97年1月29日放映-よみがえる自筆“おくのほそ道”)を扱った後での感想をもとにした感想紹介の例をあげる。

◆平成9年12月(85時間目)

()は紹介者が言いかえた部分。

N男…「これからみんなの声を始めます。初めにH子さんの感想を紹介します。」

N男…「芭蕉の自筆本を見て、紙を74か所もはって推敲を重ねたことを知ると、すごく苦労したんだなあと改めて感じた(感じました)。これだけ推敲を重ねたということは、新しい俳句の世界を後の世代に伝えたかったのだと思った(思いました)それも、強い思いだったことだろう(ことでしょう)。でももし、推敲を1回もせず今まで来ていたら、私たちは今の有名な句など知らないことになるけれど、何だか不思議な感じだ(感じです)。変化はおもしろい(おもしろいです)。」

T子…「次にO子さんの感想を読みます。」

T子…「今日自筆本を研究したのを見たのですが、「遊行柳」の時、西行を意識して1回作った。というのがすごく親しみがもてました。そして、それを砕いて自分のものにする。私も漫才をやる時にまず、突っ込みのイメージを「あのタレントさん」と頭にえがきながら(突っ込んだりします。)そこから砕いて自分のものになると、人の心を打つものができるのだな(と思いました)。」

N男…「H子さんの感想を読んで、もし1回も推敲せずに今まで来ていたら、確かに今の芭蕉の句を知らないことになります。で、僕は、今の芭蕉の句もいいと思うし、最初の句もいいと思うんですけど、やっぱり今回の自筆本が見つかったことで、芭蕉がどうしてこういう句を作ったのかというその過程みたいなのを知ることができたってことはすごく大きな発見だと思います。」

T子…「O子さんの感想にあのタレントさんと頭に描きながら突っ込んだりしますとあるんですけど、私も今ダンスとか体育でやってるんですけど、創

作ダンスは自分たちで作るより、なんか、有名な人とかをまねした方がすごい簡単なんですけど、でもなんか、そう、まねをしてるだけじゃなくて自分のものにできるようにもう1歩進んだら成長すると思います。」

N男…「僕がこの感想に題をつけるとしたら、一変化の面白さーとつけたいと思います。」

T子…「O子さんの感想に題をつけるとしたら、一創り出すーって題にしたいです。」この日の紹介者の1人であったN男は前時に次のような感想を書いて提出していた。今日のN男の紹介の背後にこのような思考の跡があることを「かかわり」(資料⑮・⑯)として、私が紹介をして、この日の「みんなの声」を閉じた。

芭蕉の句に他人の影響があったというのは意外だった。僕は芭蕉は自分だけが持つ独特の世界で句を作っていたのだと思っていた。芭蕉は孤独な人であったのに、彼に多大な影響を与えた西行という人はきっと芭蕉と同じようにすごい人だったのだろう。でももっと驚いたのは、芭蕉が西行の歌をまねて句を作っていたのだが、それで終わるのではなく、推敲の末に「立ち止まる」から「立ち去る」とかえて西行の世界からぬけ出していたことだ。それは西行への敬意であると共に、対抗意識や、彼を越えようとする思いであると思う。尊敬する人の言葉や行動をそっくりまねるのではなく、取り入れつつも、自分というものはっきり確立しているところは見習いたい。(N男の感想より)

◆平成9年12月(86時間目)

H男…「じゃあまず初めにY君の感想を読みます。」

H男…「ぼくは今、芭蕉にあこがれている(います)今の僕には自由に旅ができる時間がない(ありません)。僕がもし、芭蕉について知らなかったらこう思うこともないだろう(でしょう)。芭蕉も西行にあこがれたように、僕も芭蕉にあこがれている(ます)。人の生き方には、これほど人を引き付ける力があるのだろうか(でしょうか)。」

(資料⑱)



S子…「次にU君の感想を読みます。」
 S子…「僕は『おくのほそ道』が、非常に短い作品であるということに驚きました。ついこの間、とても短い作文を書くことになり、どうしても、その文字数内におさまらなくて「この言葉はいらぬ。この文章は、こういうふうには要約した方がいいな。」と、推敲していった短くするのにとても苦労しました。そうして作った文章は、1文字1句、これしかない、というものに近づいた気がします。きつと努力の天才芭蕉も、そうやって、短い名作『おくのほそ道』を完成させたのだと思います。」

H男…「Y君の感想を読んで、僕も、Y君のように、なんか人生、人の生き方をまねできるような人に会えるといいなと思いました。この感想の題は一人の生き方の影響力ーとします。」

S子…「私はU君の感想を読んでこないだ、前々回のテストの時の作文の時にだらだらと書いてしまって字数内に収まらなくてすごく苦労したことを思い出しました。芭蕉はそういうのをじっと推敲を重ねてあの名作の奥の細道を完成させたので、すごいなと思いました。この感想に題をつけるなら短い名作ーにしたいと思います。」この日の「かわり」として、D男をはじめとして何人かの感想を紹介した。

今日は、芭蕉の推敲過程の学習をしたが、あらためて芭蕉がどれだけ苦労して推敲を重ねたかを知った。本当に好きなことじゃないとそこまでできないと思った。本当にやりたいことをやらせてくれない現代に生きている僕たちにとって、芭蕉のやりたいことをやり続けた生き方はうらやましく思えた。」 (D男の感想)

◆平成9年12月(87時間目)

K男…「これからO君の感想を紹介します。」
 K男…「D君の感想などより、たしかにはくらは自分のやりたいことができにくい、見つけにくい世の中にいる。また、ほかのクラスの意見より、義務教育の正当性、必要性だつてわかりにくい。そのことに疑問を持つことはとても大切だし、大事なことだ。しかし、僕は思うのだが、疑問を持つことは誰にでもできることだと思う。誰にとっての人生なのか、誰のための教育なのかということだ。疑問を持つこと、反発することは、動くことへの準備であっても、動いたことにはならない。何もかも社会のせい、義務教育のせいにしてしまうのは、少し甘えをふくんでいるのではないか。」


ルーズリーフ (資料⑮)
 12/12 (86)

| | | | | | | | |
|------|---|-------------------|---|---|----|----|----|
| 生徒番号 | 3 | 7 | 4 | 6 | 柔道 | 提出 | 成績 |
| 氏名 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 探 | 探 | 探 |
| 野村 | 1 | 西行の遺書、おのほそ道 | 探 | △ | 〇 | 〇 | 〇 |
| 藤村 | 2 | 「あんなの死」として紹介された自己 | 〇 | △ | 〇 | 〇 | 〇 |
| 山根 | 3 | 俳句(芭蕉、紹介、俳句)自己 | 〇 | △ | 〇 | 〇 | 〇 |
| 徳島 | 4 | 自主学習! | 〇 | △ | 〇 | 〇 | 〇 |

二、野田くんと、
 〇本当にやりたい事を出来た芭蕉
 〇本当にやりたい事をやらせてくれない
 社会(現代)」

飯塚さん「良い言葉があったら何れも書き直して。竹山さん「推敲過程が残っているのがいい。中村さん「真似て終るのだから自分のもの。渡邊さん「真に西行を学ばない。木村さん「西行はバイブル的存在。岡崎さん「西行を越える事が西行に対しての。養さん「西行日やわらかい感じたりと芭蕉はかたい感じ↓等一これではない。」

感想
 西行の死に方には驚かされた。自分の理想の死に方そのままだ。さうして未来を予知している様です。前に何かが本、未来は後ろから来ていて過去に前に続いている。確かありました。未来は見えなくて過去は見えるという事です。」



自分の人生なのだから、結局は自分のところに帰ってくる。(かなり長かったので一部省略して紹介した。) ようするに、いいたいことは、疑問や反発を抱くだけで何もせず、しなかったことを義務教育や社会のせいにしてしまうことのないように、そして自分のしたことをほこれるように。僕は今の世の中でも、できることはたくさんあると思います。」

H子…「次にW子さんの感想をよみます。」
 H子…「今日のD君の感想にはすごく同感した。たしかに今の社会はあまり好きなことをさせてくれないような気がする(します)。でも、それを言いわけにして、やりたいことを探さずにただ「毎日つまらない。」と言いつつ暮らしている人もたくさんいると思う(思います)。その気になれば結局は何でもできるんだと思う(思いました)。
 K男…「えー、僕はO君の感想を読んで、えー、自分も他人のせい社会のせいにしてたと言う節がちょっとあるなと思います。それで自分でえー自分で考えていろいろと自分で行動することが大切なんだなと思いました。えーこの感想に題をつけるとしたらー自分で行動するということーにしたいと思います。」
 H子…「と、私もD君の感想にはすごく同感したん

7. 考察

(1) 学習記録（ルーズリーフ）の位置づけ

学習記録は、実際のさまざまな学習の中で書かれるものであり一定の型はないものであるが、ここでは、その中心となっている毎日の学習の記録（ルーズリーフ）について考えることにする。今回の実践の核の1つがこの学習記録である。

学習記録用紙として、毎回4クラスの生徒に提出させても、かさばらず、持ち運べ、処理がしやすいことから、ルーズリーフを使用している。

安居總子氏は、学習記録について「私は、ノートに3つの機能があると考えている。

- ①記録性…覚え書きのためのメモやノート、生活や事実の記録、思考の軌跡、表現の確認
- ②練習性…おぼえるため、技能習熟のための練習、ドリル
- ③資料性…情報の収集、分類、整理、保存、活用（中略）

学習ノートがこうした機能をもつがために、国語の学習の多様性を学習者が理解できずにいるという一面も持ち、そのために学習ノートを単元の課題としてもちこむ難しさもあると思われる。すなわち、学習者の国語のノートへの問題意識が個々に違った座標軸をとるために一般化・焦点化できないのではないかという懸念、そしてそのまま学習が進行して相互交流も成り立たずひとりよがりの思考に終わるのではないかという心配である。」と述べ、こうした多様な機能をもつがために、単元の課題としてもちこむ難しさもあると指摘している。

私は、学習記録（ルーズリーフ）をこの3年間の実践から、次の4つの場をつくり、生かしていくものとして位置づけることができるのではないかと考えている。

①生徒と教師との対話の場（生徒一人ひとりをつかむために教師のすべきことー学習記録を通しての対話ー）

今までの国語科学習、いや学校での学習の中で教師は一方的に子供たちにさまざまな課題を課してきた。今度は、子供たちから出される課題や声に心をとめるべきではないか。

1人ひとりの子供と毎回対話していくことはもちろん不可能である。しかし、せめて子供たちが学習の中で記録したり考えたりしたことを、日々、見つめ子供たちを理解しようとする努力はできるのではないだろうか。

②チェック表によるルーズリーフ機能の確認の場（学習記録の方向を示す）

安居氏が、①記録性・②練習性・③資料性の3つをあげているように、私が日々の学習記録をチェックしていく中で大切にしてきたのは、1年生のときには練習性であり、2・3年生では記録性であった。ルーズリーフが資料性・記録性を大いに発揮するのは、学年末の学習記録の綴り（私の1年間の記録＝1冊の本）を作成するときである。

③感想・意見・疑問・提案の自由な場

あくまでもその日の学習にかかわっての感想や意見が中心であるが、時には疑問・提案も書かれ、生徒の反応を知るための重要な場である。

④自主学習の場（ルーズリーフの裏面を利用）（日常の言語生活への広がりを目指す）

1人ひとりの個性の発揮できる場であり、同時に発信の場でもある。学級を越えて紹介したり、考えたりできる材料のひとつとして活用してきた。

自主学習の紹介

（資料⑩）

自主学習最終回！さようなら自主学習！

今回をもって、二百三十四回続いた自主学習を終了する。記念すべき第一回の漢字練習からはじまり今回まで、沢山のことを調べ、考え、意見を述べてきたことを、私は誇りに思う。

（中略）

私はこの自主学習でいろいろなことをした。漢字練習からはじまり、ことわざ、調べもの、新聞記者、意見、詩。やりたいことはすべてやった。やってやった。自分の全てを表現しきったから終わる。

未来にまたひらいたとき、このページを見て、はずかしがることが見える気がする。中学生生活で学んだことがわかれば良いと思う。そして…と続けられるように。

最後に長い間ご愛読して下さったみなさまに感謝。寺本先生ありがとうございました。

そして今から新しい扉が開かれる。はじまりのはじまり。

(2) チェック表と学習記録（ルーズリーフ）

学習記録を単なる記録ノートではなく、子供たち1人ひとりの学習の足跡と見ていこうとすると、指導者の視点やねらいを生徒にはっきりと示していく必要が出てくる。そこで私が考えたのが学習記録チェック表であった。毎日ただ提出させるのではなく、そこに学習記録としての価値を感じさせていくことができるようなものが作れないだろうかという願いもあった。

3年間の実践を経ても完成したものとは言えない

が、その試行錯誤の跡を考察してみようと思う。
(ここでは変遷を知るために5種類全部のチェック表をあげて考察していく。)

No. 1

| | | | | | | |
|----------|---|--------------------------------|--------------------------|---|---|---|
| 1年組番氏名 | | | | | | |
| 学習記録チェック | 1 | 提出すべき時に提出したか | | A | B | C |
| | 2 | 丁寧に文字がかけたか | AA | A | B | C |
| | 3 | まとまった意見や感想がかけた | AA | A | B | C |
| | 4 | 国語学習への努力や工夫 | AA | A | B | C |
| | | <input type="checkbox"/> 文字の濃さ | <input type="checkbox"/> | | | |

1年生の4月には、上質紙に印刷したこのチェック表を使用した。生徒は、授業が始まる前に、はさみと糊を使って、ルーズリーフの左上にこのチェック表を貼るところから学習が始まっていった。毎回このチェック表の項目を中心にルーズリーフをチェックしていくのである。

私にとっても、毎回ルーズリーフを提出させ、それをある観点(ここではチェック表の評価項目がそれに当たる)によって目を通し、次の学習へとつなげていくために大変重要なものであった。

しかし、このような学習は私自身も初めてであり、生徒の反応によって、このチェック表はずいぶん変化を遂げていくことになる。

No. 2

| | | | | | | |
|----------|---|--------------------------------|-----------------------------------|---|---|---|
| 1年組番氏名 | | | | | | |
| 学習記録チェック | 1 | 提出すべき時に提出した | | A | B | C |
| | 2 | 丁寧に文字がかけたか | AA | A | B | C |
| | 3 | 充実した意見や感想である | AA | A | B | C |
| | 4 | 学習記録の内容の充実 | AA | A | B | C |
| | 5 | 国語学習への努力や工夫 | AA | A | B | C |
| | | <input type="checkbox"/> 文字の濃さ | <input type="checkbox"/> 忘れ物(有 無) | | | |

No.2は、No.1のほぼ1か月後に提示したものである。

大きく変わった点の第1は、生徒たちの準備の時間を省くために、上質紙に印刷していたものをタックシールに印刷し、のりづけを不要にしたことである。

第2は、学習への姿勢作りとして、忘れ物のチェック欄を増やしたことである。第3に、No.1の3で「まとまった意見や感想が書けた」という項目を「充実した意見や感想である」と「学習記録の内容の充実」と二つにわけ、感想欄と板書記録欄のチェックをわけたところがあげられる。

とにかく1年生の初めのチェックとして、この2つのチェック表に共通した思い(ねらい)は、3年間を通して確実に身につけていってほしいことにあった。

つまり、提出すべき時に提出すること、丁寧に文

字を書くことができること、相手を意識して適当な濃さで文字を書くことという3点を強調していた。(シャープペンシルを使用することは構わないが、芯の柔らかさと濃さから、Bか2Bの芯を使うことをすすめた。)

No. 3

| | | | | | | |
|----------|---|--------------|------|------|---|------|
| 生徒番号 | | | | | | |
| 氏名 | | | | | | |
| | | 藪 | 提出 | 合格 | | |
| | | 稜 | 文字濃さ | 適 不適 | | |
| 学習記録チェック | 1 | 丁寧に足跡を記録できる | 美 | A | A | B |
| | 2 | 授業記録の内容の充実 | 言羊 | A | A | B |
| | 3 | 感想や意見に深まりがある | 深 | A | A | B |
| | 4 | 自主学習 [] | 発 | A | A | もう一歩 |

1年生の末からこのチェック表No.3を提案し、使用した。

ここでは、提出と文字の濃さは基礎・基本の事とし、板書と感想に焦点を当てたチェック表に変化している。したがって、「感想や意見に深まりがある」という項目に変わってきている。

また、ABCだった評価を、その項目が求める評価がより分かるように、最高の評価を、美・詳・深・発見としてみた。

この頃から、感想を評価することに対して私自身の中に疑問や迷いが生まれてきた。感想は自由のびのびと書かせたい、したがって、それを1人の人間が評価することは、自分の感性や考え方に合ったものを優れた良いものとする、一方的な評価になってしまうのではまいかという恐れがあったからである。

しかし、また一方では、150字~200字程度で、学習の中で保障した5分間の中で、継続的に書かせ紹介していく中で、自分の考えに自信を持たせ、文章を書くことに慣れ、書くことを苦にしない力をつけていきたいという思いもあった。

No. 4

| | | | | | | |
|----------|---|---------------|------|------|---|---|
| 生徒番号 | | 3 | | | | |
| 氏名 | | | | | | |
| | | 藪 | 提出 | 合格 | | |
| | | 稜 | 文字濃さ | 適 不適 | | |
| 学習記録チェック | 1 | 癖を意識し丁寧に記録できる | 美 | AA | A | B |
| | 2 | 記録内容の充実、メモの力 | 言羊 | AA | A | B |
| | 3 | 根拠を示す。具体的に書く。 | 深 | AA | A | B |
| | 4 | 自主学習 [] | 発見 | AA | A | * |

このような迷いの中で、2年生の1年間は過ぎていった。3年生になって、そのような迷いを解決するために、No.4を生徒に提示した。

つまり、ねらいを「文字を書くときに癖を意識してほしいこと」「記録ではメモの力を養うこと」「感

想や意見は具体的に書くこと、そして根拠がはっきりと示してあると分かりやすいこと」とより具体的に生徒たちに示そうとしたのである。

No.4のチェック表を使い始めて少し落ち着いた頃(10月の中旬)、子どもたちに「みんなの声」と「チェック表」についてあらためて意見を書いてもらう機会を作った。

子どもたちから出た声は次のようなものである。

1年の時からずっと続けられてきた「みんなの声」はとてもおもしろいのでとても好きだ。授業の感想で、その人の感性・考え方とかその人らしさがいろいろ発見できてそれまでよりもっとその人に近づけるから…。

ルーズリーフのチェックは、毎回少しでも良い評価をとろう！と自分の中でやる気を起こさせてくれるので、1つの目標として有り難く思っている。(I子)

チェック表は国語という教科にしかないもので、僕としては賛成です。他の教科には、なかなかチェック表みたいにすぐに自分のことがどう評価されたかが毎回分かるものがないからです。チェック表というものを目標にして頑張るといのは悪くないと思います。(Y男)

読みながら、私の中に、知らないうち良い評価を取ることをよしとし、子どもたちに競争心をあおらせていたのではないかという恐れが大きくふくらんでいった。

毎回授業の感想を書く、それを使って授業をする。これはとてもいいことだと思う。いろんな人の意見がわかり、授業が深まるのだから。しかし、ルーズリーフのチェックはどうだろう。いい評価を得るための記録になってしまい、自分の受けた感想や、成長の記録としては違ってきてしまうのではないか。だが、確実に力がつく学習である。(S子)

私は、すごくこのシステム「みんなの声」と「ルーズリーフチェック」は好きである。小学校の国語なんかじゃ全然考えられなかったことだったからである。でも、あえていうならルーズリーフのチェックは、チェックをつける人の個人的な解釈なので自分がいいと思っている時

でもあまり気にいらぬ評価の時は少し悲しくなる。が、私はこのシステムが好きである。

(O子)

本来、このチェック表は子どもたちが自己成長していくための目安として作ったはずのものであった。それを結局は単なる評価の道具として利用している自分自身がいることに気づかされた。(学期ごとに、ルーズリーフのチェック表を使って、自分の学習を振り返る評価を繰り返してきていた。具体例は後にあげる資料A・B・C・Dにある)

子どもたちの声に気づかされて、これからの学習の方向を示すチェック表として考えたのがNO.5の「新記録メモ」である。

名前も「チェック」から「新記録メモ」と変えたのは、今まで教師の主導であったルーズリーフを本来の自分自身の学習記録メモとしてとらえ直し、自己の成長記録、足跡の記録としてほしいという願いを全面に打ち出したいからである。

No. 5

| 生徒番号 | 3 | | | | 素 | 提出 | 合格 |
|---------|---|------------------------|--|---|----|----|-----|
| 氏名 | | | | 礎 | 卒業 | 適 | 不適 |
| 新記録メモ3年 | 1 | 内容の確かさ、ポイントをメモでき | | | 正確 | A | B ※ |
| | 2 | 「みんなの声」として紹介された 自己チェック | | | | | |
| | 3 | 係活動(板書、紹介、時間) 自己チェック | | | AA | A | B |
| | 4 | 自主学習 [] | | | 発見 | AA | A ※ |

ここでは、最終学年として、文字の丁寧さも基本的なこととしてとらえ直し、感想の評価をやめ、学習内容を確かにとらえメモできていることをねらいの中心として出したものである。

最終学年での学習を終える頃、5種類のチェック表について、K男は次のように記している。

僕は、このチェック表が好きなことも嫌いな時もありました。好きなところといえば最高のランクを取った時、嫌いな時はAやBを取った時です。チェック表の変化を見ると、昔はあいまいなチェックがあったことです。例えば、意見・感想のところは、自分では納得したもので、AやBだったりします。だからAAや深をとるために、建前やどうすれば良いかを考えたりして、本当に思っていたことや、感じたことが書けなかったりしていたと思います。それで、授業メモになってから、気が楽になり、少しずつだけ書けるようになりました。(K男)

そういう子どもたちの心に近づき、興味や関心を育て、耕していくために、今しなければならぬこととして始めたのがこの学習であった。

綴りのあとがきや感想に、子どもたちは次のように記している。

今学期は、チェック表が変わったことで、私の感想についての思いが変わった学期だった。感想評価がなくなったチェック表は好きではないと以前に書いた。しかし、何度か使っていくうち「評価にとらわれず自由に書ける」というのが分かってきた。評価がもらえるから自分は一生懸命書いていると思っていた。が、伝えたい、残したいから書いているのではなかったかと思うようになり、以前にもまして感想が心により近い形で表せるようになった。そのため、ルーブリーフはより自分のための成長記録になったと感じている。(S子) 3年次

わたしは「みんなの声」が昔に比べて明るくなってきたなと思いました。なぜかという、最初のころは先生が選んで先生が紹介していて、次に生徒が紹介したり自分の感想も紹介できるようになったり、今では自分で紹介の声を選べるようになったからです。そして、クラスや学年の壁を越えた声もありました。私はこういうふうになったのは、自分たちが成長したからだと思います。だから、また姿を変えたチェック表がみたいです。(I子) 3年次

チェック表はかならず書くらんが減ってきている。私はそれにたいして賛成だ。なぜなら社会に出たとき役立つと思えるからだ。細かくチェックするのもいいけれど、全体としてどうか大切だと思うし、自分でチェックできる人間になりたい。だから、今使っているメモのように、ある意味突き放していくのも必要な気がする。そして、みんなの声を選ぶようになってから、参加する授業ではなく、以前より、生徒がより作っていく授業になった。(U子) 3年次

5つのチェック表が変わるにつれて、だんだん生徒中心にみんなの声が進められるようになってきたなと思った。4回目のチェック表の評価もあったせいかメモの力はすごくなったと思う。

5回目のチェック表は係活動などができて違った視点から見つめて、自分たちの意見が反映される評価になっていてうれしい。チェック表とともに自分たちの成長も思い出せる。チェック表は私の成長の記録なのでこれからも書き続けたい。(M子) 3年次

初めは記録もチェック表にもまだ慣れず、基準もやさしかった。少しずつ評価が厳しくなったり、評価がなくなっていることから、僕たちが文章を書く力を着実に身につけていること、先生との間に信頼関係ができたことがうかがえる。今はみんなの声、チェック表ともに自分で決めるものが多くなっている。今だからこそのことだから、今後も同じ形で続けてほしい。2つとも書く力がつくこと、考えが深まることが長所。個人の価値観が出てしまうことが短所では。(N男) 3年次

みんなの声やチェック表は変わるたびに少しずつ良い方向へいっていると思う。このように、先生が腐心して僕たちの自主性や個性を授業に出させようとされることに感謝せずにはいられない。また少しずつ変わるごとに国語の学習の進歩のようなものを感じる。ところで、みんなの声とチェック表の長所だが、前回の授業を振り返り、次の授業につなげるという点では、とても価値があることがあげられる。短所としてはチェック表が点数化されることだったが、それも、ほぼ解決されたので特にない。国語の授業はこれからも進歩すると言えよう。(A男) 3年次

以上のような声も多く見られ、この帯単元「みんなの声」という学習によって、

第1に、学習を自分たちが作っているという実感を持ち、新しい視点と気分転換ができる。

第2に、遅進児にも発表の機会や紹介される機会を与えることができ、学習への態度・習慣を養うことができる。

第3に、1人が考えたり得たものをみんなに分かち与えることができ、それを習慣化することができる。

第4に、学習記録に自分の思いを工夫して表現する意欲や態度を養うことができる。

という今までの学習指導では得ることのできなかった効果が生まれてきているのではないかと考えている。

「学習記録が生み出す国語学習」、日々の記録から開けてくる世界が確かにある。

そして何よりも、継続実践によって学習記録を書き綴っていくことが子どもたちの生活の一部になっていったことが1番の喜びである。

授業の中では気づかない子どもたちの「心の声」を少しでも受け止めようとしたことは、子どもたちに伝わり、お互いのコミュニケーションの場としての可能性を広げてくれたことも大きな成果といえよう。

また、この「みんなの声」を自分たち自身が作っているのだという子どもたちの意識が生まれてきたこと、この中でのお互いのかかわりが好きだという子どもたちの声が最後まで多かったことを嬉しく思う。

それは、教室の中での相互理解、コミュニケーションづくりに、この実践が効果的であることを示したものであると考えたい。

大村はま氏は「学習記録を取り上げ、話題にしていくことによって一種の親しみが出てくる。学習記録になじんでくる。そして、生活の一部になってくる。」と述べ、学習記録を書いていない子はいないと述べている。

しかし、私の実践の場合、良い記録、窮屈な記録を子どもたちに課したために、学級内で数人ずつ、学習記録を書く意義を見いだせず、意欲をなくしてしまった子を生み出してしまったのも事実である。

3年間手探りで「通じ合い」のある学習室を求め、教室でのコミュニケーション力を回復させよう、仲間とともにいる、ともに考え、刺激し合い、支え合っていく学習の場づくりを試みてきた。

その中での最大の発見は、3年間、毎回160名の感想を読みながら感じた「生徒の力」である。

1回1回と学習を積み重ねていくことによって、わずかではあるが子どもたちの個性にふれていくことができたように感じる。しかし、同時に、子どもたちに私という人間の小ささをを見ぬかれ、試され続けてきたのではないかとも思う。

子どもたちとともに考え、学び合うことのできる学習室を目指して今後も実践を続けていきたいと考えている。

(注1) 授業リフレクション

「よりよい授業にするために、自分の授業をふり返り、学習者の学びとともに、指導者自身のかかわり方を見つめ直す」こと。

(注2) かかわり

「みんなの声」という学習の中で、できるだけたくさんさんの学級の声を紹介しようと考えたものである。紹介係の生徒が紹介しきれないクラスの声、教師が紹介していく形が基本である。

引用文献

- ・大村 はま (1982) 大村はま国語教室12
- ・神谷美恵子 (1982)
著作集3『こころの旅』(みすず書房)(P7)
- ・倉澤 栄吉 (1989)
全集第2巻『国語教育の問題』(角川書店P211、P212、P215)
- ・野田俊作・萩昌子 (199)
『クラスはよみがえる』(創元社P92～P94)
- ・安居 總子 (199)
『「学び」をひらく国語教室』(東洋館出版社)(P157～P158)
- ・朝日新聞「ウォッチ論潮」1997、7、15日
- ・山陰中央新聞
「透明なボクたち上」1997、7、15日

【参考文献】

- ・日本国語教育学会編(1994)
『月間国語教育研究ーコミュニケーション能力が育つ学習ー』No.264 4月号
- ・初等教育研究会(1998)
『教育研究』ー他者とのかかわりでそだつものー3月号通巻1153
- ・田近洵一編集(1993)
『現代国語教育論集成 西尾実』(明治図書)(P307)